

花

むかし、ある人から聞いた話である。
欽造が高校を中退したのは、落ちこぼれたのでなければ退学処
分にされたのでもない。中学に入るときに父親が酒で死に、それから
分になつたのみどりを引き取って面倒を見てくれた同じ町内に住
む叔父夫婦に、これ以上迷惑はかけられない自分の働きで自立しな
ければ申し訳ないと考えたからだ。
けれどりが誕生した直後に母親が死んで、それからずっと父親の手
で育てられた欽造は、わづかながら小学校にはほとんど親の記憶とい
い。欽造には、わづかながら小学校にはほとんど親の記憶とい
りにはそれさえなかつた。父親は寡黙な機械工で、二人の子供に愛
情を表現するといふことをしなかつた。家に帰ると酒ばかり飲ん
いた。だから、少女であつたのはほとんどの奇跡に近い。叔父と
心をいさなす。少女であつたのはほとんどの奇跡に近い。叔父と
りを我が子のやうに、いや自分たちの子かなく実の子ではなかつた
からこそ、かわいさといふ事もある。与えられたものかであるよ
だつた。粗暴で小学校の頃から年中けんばかりしてゐた。不幸な
こと。欽造はけんか謝りに行つた。相手の前でもし
連れて相手の家に謝りに行つた。相手の前でもし

ねないかのようひたすら謝罪を乞う父親の姿を見て欽造はいつも
理不尽なものを感じていた。家には欽造が反発するたびにさらに父
毆打した。自分が悪いのではないと欽造からけんかを仕掛けるとい
親は欽造を殴りつけた。実際には欽造の悪口を言っからかうことだっ
ことはなかった。貧しさやひ弱な妹の悪口を言っからかうことだっ
い身なりや家の貧しさやひ弱な妹の悪口を言っからかうことだっ
た。欽造にはそれが許せないことだった。
が。欽造は粗暴ではあっても根は実直で正直だった。正直の上には馬鹿
が。学校での揶揄の対象になった。しかし欽造には何が正しいこと
も。間違って欽造の不幸の始まりだった。直感的に分かる面があった。それが
かえって欽造の不幸の始まりだった。病弱な妹のみどりの二人は仲のよ
い。兄妹として近所で評判だった。なぜこのように対照的な組み合わせ
せの兄妹が存在できるのか、それはとても不思議に思えた。「掃き
溜めに鶴」などという使い古された比喩ではとうてい及ばないもの
が。みどりの中になどあった。しかしそれは同じ一つの魂がこの世に現れ
るときに別々の側面を表すように示されただけなのだ。二人に共通
は。もちろんだ。欽造にも悪意というものがかけられないことである。みどり

北向きの木陰の同じベンチだった。みどりはそこに座って他の子供たちが元気に遊ぶのをうれしそうに見ていた。そんなとき与える造は、自分の有り余る体力のほんの少しでもみどりに遊ぶことができると、自分の頑健さをうとましく思った。みどりの足下に小さいゴムまりが転がってきてそれを追って幼女がかけてきた。みどりがそのまりを拾って幼女に渡そうとすると、幼女は一緒に遊ぼうとみどりの服の袖を引っ張った。

「ごめんね。おねえちゃん一緒に遊びできないの」

張る。欽造は低くしゃがんで幼女の投げたまりを受け取っては静かに転がして返した。少し離れた場所からその幼女の母親らしい若い女性が幼女を呼んだ。一見暴力的な印象を与える欽造をおそれて、このことではない。その母親も欽造とみどりのことは知っていて、二人が一緒の時間を過ごしていることを遮ってはならないと考えたのだ。その兄妹が二人でいる場所は、何か神聖で犯してはならないもののように皆が感じていた。

公園から帰る途中、みどりは道ばたのほんのわずかな土の間に咲く小さい花を見つけてしゃがみ込んで愛でた。欽造が一緒にしゃがんでその花を手折ろうとすると、みどりは小さな手を欽造のいかつ

「手の上に置いた。
「そつとしておいてあげて」
は 欽造は黙ってその言葉に従った。言葉になる以前の段階で、欽造はそのはかない花に対するみどりの慈しみの心を理解していた。

ようにならなくよほどのことがない限り欽造は喧嘩を仕掛けられるようになつていたからである。そのころには欽造の存在は広く知られるようになっていた不良の集団があった。学校の中にはいつも刃物を持ち歩いているような不良の集団があった。しかし彼らに限っていえば彼らの中の誰も欽造に喧嘩を売ることにはなかつた。欽造に腕力で勝てない。欽造はその年齢ですでに、自分の役目は自慢で守ることにあつた。自分はそのために生まれてきたのだと、いざ一つの決意を固めていた。そのように人生に覚悟を決めた人間に対して、どちらの方が強いかというつまらないことだけで喧嘩を売ることがどれほどの意味があるか。そのために生まれてきたのだと、いざ一つの決意をどの意味があるか。そのために生まれてきたのだと、いざ一つの決意をでは欽造に対して畏怖の念を抱いていた。基準で判断して、ある意味

ざれた話と叔父夫婦は違つていてこういふことだ。今の世間という

るようなことはしないと、言い残して去っていった。

ム、欽造の体格と体力を見込んで、プロレスの団体やボクシングの中にある暴力への傾向をおそれた。他人をなぶったり痛いところなどで金銭を得るといふことが、理解できない何か許し難いことのように思えたのだ。それに地方巡業に長く出ていたら、みどりのそばにいてやることもできなくなる。たとえ成功して金銭を手に入れることができたとしても、みどりのそばにいては、考へた。

欽造は自分が高校に進学することについては、いふほど悩んだ。自分は頭が悪い人間であり、これ以上勉強したとしてもあまり意味はないのではないか。それよりもすぐにでも仕事を探して叔父夫婦にこれ以上負担をかけないようにするのが正しいことなのではないか。そう考えて叔父に相談した。叔父は欽造が高校に通うことは負担ではないと返事した。世間の誰もが高校に行くからといって、欽造に高校に進めと言っているのではない。たとえ高校で十分学ぶことができないとしても何かを学び取ることはできる。それは将来にならぬ。何倍にもなってもみどりにかえってくるのだ。三年間は回り道ではない。叔父はそ

う説得した。欽造は叔父の判断を信頼して高校に進んだ。しかし結局は欽造は高校を中途で退学した。そのいきさつはすでに書いたとおりだ。叔父はもう少しの辛抱ではないかと思いとどまらせようとしたが、欽造の決意は固かった。それに欽造は学校にいとまらせようとしたが、どこは自分にあつた場所ではないように感じる。だともなけたのである。それから、職を転々とした。飽きつぽいのもなければ辛抱が足りないのもない。どのような職場に就いても、ほんの少し気が回らないこと、不器用なこと、要領よく立ち回れないこと、そのようなことで常に違和感を感じていた。ひどい時には半日で、帰れもう来なくていいと言われたことがある。欽造はいつも一生懸命だったのだが、それを理解してもらうことができない。小器用にずるく立ち回る人間の方が得をする、そのような世の中に既になつてしまつていたのである。

ある時欽造は叔父に、どうやったら自動車の免許というものが手にはいるのかを尋ねた。叔父は、十八才になつたら試験を受けられる、練習はそれ以前に始めることもできるのだと答えた。欽造はそれの言葉を聞いてすぐに自動車学校に通うことに決めてなるべく家か職場に近いところ、学校があるかどうか探した。自動車学校の資料を手に入れて、欽造は驚いた。入学金と授業料というものをあわせる自分の月給の三倍近くもかかるのだ。そんな金の持ちあわせはな

いしそれほど金のかかる学校というものはどういうものなのか想像もつかない。しかし今の世間では自動車の免許を持つている方が収入も増えるし仕事を選ぶ範囲も広がる。そうすればみどりを今より人も楽にしてもやれるしひよつとしたら今よりもいい治療法というのがかなうかもしれないと考へた。欽造は自分でいったん決めたことを覆すことに後ろめたさを感じながら叔父に頼んだ。給料がよくなくなつたらすぐに返すからしばらくの間だけ金を貸してくれないだろうか。と話した。叔父夫婦の家計も決して楽ではないということを承知してのことである。よくよくの覚悟だったのだろう。叔父は、他人行儀な水くさい言い方はよせ、金だったらいずれ出世払いで返してもらえばいいのだと、実はなけなしの金を欽造に与えた。

みどりは高望みはしない。今の生活のまま叔父と叔母の慈愛を受け兄に守られながら一緒に暮らせるだけで十分幸福だったのだ。何か自分に関係のあることで、欽造が叔父に無理なことを言ったのでははないかと、そのことの方をむしろ心配していた。

自動車学校の教室でどうしても話の内容が理解できないままいつの間にか居眠りをしてしまふ学科が終わって実技の段階になると、欽造はいつも腹を立てながら帰宅した。やり場のない怒りがこみあげてどうしようもない、だからといって指導教官にあのようにならなかなか上達しない、だからといって指導教官にあのようにならな

のろ、まぬけ、ぐず呼ばわりされるいわれはない。こっちはあれだ
けの大金を払ってあるのだし、言いはあんなりではないから練習して
いるのだ。それをあんない方から、何とか自分を抑えてそ
どりに当たり散らすわけにもいかないから、叔父夫婦に話した。みど
りのような扱いを受けていることをみどりと叔父夫婦に話した。みど
りは少し考えてからゆくりと話した。きつとそのひとは悪い人で
はない。おにいちやんが、おにいちやんが、おにいちやんが、おにいちやんが、
ら自分も一生懸命になつて、心にもないことをいつてしまふの
だ。おにいちやんはおこりんぼだからどうしても腹を立ててしまふの
のだ。うが、そのひとの気持ちもわかっただけで、いけな
い。造がなんとか課程を修了して筆記試験にも合格して、運
転がなるとか、できたのは、ひとえにみどりのこの言葉を肝に銘じ
ていたからだ。
は、造の免許が十分に役に立つたとは言えない。運転の操作の仕方
は、体が覚えていて、造にしてみても、珍しくはない。だが、造は、
を、読むと、いうことが、どうして、珍しくはない。自分、が、
に、いて、目的、地、までの、経路、は、どう、な、つ、て、い、る、か、
ら、読、み、と、る、こ、と、が、で、き、ず、実、際、に、何、回、か、運、転、し、て、
の、だ、。、造、の、運、転、の、仕、方、と、い、う、の、は、目、的、地、の、
か、り、や、す、い、幹、線、を、行、つ、て、そ、こ、か、ら、何、回、も、間、違、え、
て、は、よ、う、や、く、た、ど、り、

着くというようなものだった。裏道や空いている道を選んで近道をするということがある。それができない。それはさながら欽造の生き方そのもののようである。

みどりは義務教育を終えた。そこまでできなかったことが信じられないことだった。みどりは体育の時には見学するしかなかった。しよっちゅうで数分間でも立ち続けていることが大変な負担だった。叔母が迎えにう具合が悪くなっても保健室で休んでいた。下校時には叔母が迎えにいかなければならなかった。いつも休みがちだった。みどりは控えめにかなければならなかった。学校の成績も、あまり授業に出なかつたにもかかわらずある程度よかつた。しかしそこまでである。みどりに遠くの高校に通える体力もなかつた。まして働きに出るなどということはとうていできることではなかつた。それからみどりの日常は病院に行く以外には叔父夫婦の家であまり外にも出ず毎日を過ごすことだった。みどりは自分のそのような運命を静かに受け入れていた。中学校時代のみどりの友達は卒業して自分が高校に進学してからもよくみどりに会いにやってくる。友達が高校でどのような体験をしているのかを聞いてそれがどのようなかを想像することがみどりの楽しみだった。その友達のうちのひとりか、テープレコーダと自分の気に入っている音楽のテープを貸してくれ

た。哀れみや同情でしたくないものではな
あり。そうみずにはいらなみどりのな
聴くこともどの中は、いづつお礼に感
レプのケースのうに、叔父の愛書を借
課になつた。あまりかかんをつめて長
つたが、それにもかゝらずみどりは本
取った。一瞬もかゝらぬ時間であつた
な事柄からでも多くな時間を取つた。そ
みどりの内面は、実生活の体験が乏しい
だつた。叔父は道路に面した家の間口の
いた。少しでも日銭が入る方が楽だと考
をす。のは叔母の仕事だつた。折に母が
店を離れるとき、はみどりが代りに店の
限つて近所の煙草を吸う男たちが、い
たと。ろに煙草の自動販売機がある。魂
りをしてまで買ひにくるので、わがざの
ではない。みどりの笑顔をみる。が、要
い物までするのだ。男たちはみどりと交
わす。ほんの一言か二言の言

葉だけでも心が洗われたのだ。みどりは釣り銭を間違えるというところがほとんどなかった。たまに金額を間違えて多く返してしまふところがある。客の方から釣りが多すぎると返してよこした。逆に少ないことがあつても客は何も言わない。しかしそういうことがあると、みどりは計算が違つてゐる、誰かから余計にもらつてしまつたのだと嘆いた。叔母はそれが数十円の金額でもその金を出した客を探し当ててわざわざ返しに行つた。みどりの心の負担を少しでも軽くしてやれないかと考え返すことである。それと同時にこの近所では数十円の日銭でも重大なことなのだ。とわかつてのことだ。

平日の欽造が非番のある日、みどりが欽造と一緒にいつもの公園に行く。一匹の猫が歩み寄つてきた。生まれつてまだ数ヶ月も立たない。うな捨て猫である。みどりが抱え上げると紙のようになつて細つてゐた。人間に飼われて餌を与えられないのだらう。みどりが試みを知らないから食べ物を探し方も知らないのだらう。みどりが試みに、ポケツトに持つていたキャンデーを湿らせて仔猫の口にあてた。みどりの目はつぶりを震わせ、みどりにしろくもした。だつた。猫は飢えてはいたが求めていたのは食べ物でなくぬくもりだ。みどりはその仔猫の荒れた毛並みをそつとなでた。し

ばらくその猫を腕の中に抱いてから、みどりは欽造にその仔猫をつれて帰ってはいけないのだ。猫の餌程度ならた。自分たちはそのような贅沢は許さないので。猫の餌程度ならどうにもなることだがそのような問題ではないのだ。みどりはそのことを理解しながらも自分が無力であることを痛感した。みどりと欽造は仔猫をベンチの上に残して公園を後にした。猫の細かい鳴き声は一度だけ聞こえた。翌日、叔父と欽造が勤めに食べた後、みどりはどうしても仔猫のことを気になつて、昨晚の夕食の残りを持ちつて叔母に頼んで公園につれていつてもらつた。仔猫はどこにも見あたらない。みどりは、みどりは、自分の存在と等しいのかと考えたかもしれない。しかし今となつては知る由もない。

いくつ目になるかわからない職場で、欽造はひどい辱めを受けた。上司に呼びつけられて、なぜあちらの棚にあるべき在庫の商品がこちらにある。欽造は、残りのひとつは更衣室においてあつて、全部たのである。欽造は、残りのひとつは更衣室においてあつて、全部言われたとおりにした。他人に責任をなすりつけているなど、そんな馬鹿げた指示を出す。欽造は自分が間違つたことはしてないはずなのだ。しく叱責した。欽造は自分が間違つたことはしてないはずなのだ。

がと納得のいかないまま部屋にもどろうとした。その時、部屋の中
から笑い声が聞こえた。「あいつは本物の馬鹿だ。自分が何をしているのかもわかっていな
い。何でも人の言うとおりにしかできない。まるで犬だ」
欽造は少し考えてからは、うやくそれが自分のことを話しているの
だと気がついた。自分には、うやくそれだ。欽造は怒った。確か
に、自分は頭が悪い。自分には、うやくそれだ。欽造は怒った。確か
し、人が人をこのように形でもてあそんでおとしめ辱めること
が許されるのか。欽造がその時感じていたのは、個人的な怒りではな
く、欽造にもわからない。欽造は、何度となくその男を殴りつけた。欽造
社員につかみかかり、欽造は、何度となくその男を殴りつけた。欽造
は、我を失つていた。もしも他の社員が必死になつて、欽造を押し込
まなければ、欽造は、その男を殴り殺して、いたかもしれない。何
か、誰かが通報したら、欽造は、何度となくその男を殴り殺して、いた
明らかなにされた。しばらく、欽造は、何度となくその男を殴り殺して、いた
起訴猶予の処分を受け赦免された。被害者が問題をこじらせた。欽造は
いと警察に述べた。欽造は、何度となくその男を殴り殺して、いた
れたのだ。しかし、欽造は、何度となくその男を殴り殺して、いた
人を暴力で、そのように傷つけた。おそれない。その男は、自分がおそ

悔していたのである。家に帰った欽造を見て、みどりは泣いた。二度と誰かを傷つけないように泣きじゃくりながら、みどりは中にはさう言っ
た。欽造は自分の行為がみどりをこまに深く悲しませたこと
とに打ちのめされた。後悔の念がいつそう深まった。みどりを悲し
ませるよくなるとは絶対後悔の念がいつそう深まった。みどりを悲し
い。は欽造のそれも我慢しよう。覚悟を打ち砕くほど、時には苛酷な
ある。

前の会社は当然辞めざるを得なかつたので、欽造はまた職を探さ
なればならなかつた。職探しをしながら、欽造はまた公園のべ
ンチに座って、みどりは欽造の間に、何か言え、みどりが
ことはないので、頼んだことはいつても、強いて言え、みどりが
より健康になつてほしい、頼んだことはいつても、強いて言え、みどりが
いうだけだ。ほい、頼んだことはいつても、強いて言え、みどりが
とさばかかられる。ようだが、みどりが、欽造は、今までの話すこ
と。しか言わなかつた。みどりが、欽造の気持がわかまつたはずだ

その夜、欽造が客を降ろしてタクシー乗り場に向かうとしたとき、走り始めた車の前にいきなり男が飛び出してきた。欽造が車を止めると、その男は後部のドアを開けると、拳で激しくたたいた。欽造がレバーを操作して自動ドアを開けると、その男は座席に乗り込んできて命令する口調で欽造に言った。

「局へ行け」

欽造にはその男が何を言っているのか理解できなかった。それで正直に問い返した。

「局つてどこですか」

「何だと貴様。なめているのか！」

「そう言つて男はもういきなり欽造の頭を横様に蹴りつけた。欽造は痛さよりも男の振る舞いにとまどつてどうしたらいいのかわからなかつた。自分に何かの落ち度があつたとどう思えないのかわからなかつた。自分で何かの落ち度客が落ちない、危険を感じたら車を捨てても逃げたか、ある程度客が落ちない、身の危険を感じたら必死に男の暴力に耐え続けた。欽造の体力からでもできなかった。ただ必死に男の暴力に耐え続けた。欽造の体力からすればその男の暴力などは問題にすらならない程度のものだつたが、欽造にとつては、この男の暴力は、自分には報われぬほどの必死になつた。

よ　　う　　な　　理　　不　　尽　　な　　目　　に　　遭　　う　　の　　か　　と　　い　　う　　憤　　り　　の　　象　　徴　　に　　他　　な　　ら　　な　　か　　つ　　た　　。
そ　　し　　て　　と　　う　　と　　う　　自　　制　　心　　が　　切　　れ　　た　　。
初　　の　　う　　ち　　は　　男　　は　　殴　　り　　返　　し　　て　　き　　た　　。
数　　回　　食　　ら　　う　　う　　ち　　に　　、　　自　　分　　が　　と　　ん　　で　　も　　な　　い　　人　　間　　を　　相　　手　　に　　し　　て　　い　　た　　事　　を　　
に　　気　　が　　つ　　い　　て　　「　　す　　み　　ま　　せ　　ん　　。　　す　　み　　ま　　せ　　ん　　。　　ご　　め　　な　　さ　　い　　」　　と　　頭　　を　　下　　
げ　　て　　何　　と　　か　　し　　て　　「　　す　　み　　ま　　せ　　ん　　。　　す　　み　　ま　　せ　　ん　　。　　ご　　め　　な　　さ　　い　　」　　と　　頭　　を　　下　　
我　　を　　失　　つ　　て　　い　　た　　。
飲　　造　　は　　血　　塗　　れ　　に　　な　　つ　　て　　横　　た　　わ　　つ　　て　　い　　る　　男　　を　　見　　下　　ろ　　し　　て　　い　　た　　。
し　　ま　　わ　　な　　か　　つ　　た　　最　　後　　の　　ぎ　　り　　の　　抑　　制　　は　　、　　飲　　造　　が　　覺　　え　　て　　い　　る　　み　　ど　　り　　
の　　言　　葉　　に　　よ　　る　　も　　の　　で　　は　　な　　か　　つ　　た　　の　　か　　。
降　　り　　て　　き　　た　　。
た　　こ　　と　　を　　話　　し　　た　　。
う　　の　　は　　あ　　る　　メ　　デ　　イ　　ア　　の　　報　　道　　局　　の　　こ　　と　　で　　、　　男　　は　　そ　　こ　　に　　勤　　め　　る　　記　　者　　で　　あ　　
る　　と　　い　　う　　こ　　と　　だ　　つ　　た　　。
の　　だ　　と　　い　　う　　自　　負　　の　　あ　　ま　　り　　、　　選　　良　　意　　識　　が　　ゆ　　が　　ん　　だ　　形　　で　　突　　出　　し　　て　　自　　分　　が　　
「　　局　　」　　と　　言　　え　　ば　　誰　　も　　ど　　の　　こ　　と　　か　　知　　つ　　て　　い　　て　　当　　然　　だ　　と　　い　　う　　思　　い　　込　　
み　　で　　、　　あ　　の　　よ　　う　　な　　言　　動　　に　　及　　ん　　だ　　の　　だ　　。
も　　の　　も　　あ　　る　　も　　の　　な　　の　　だ　　。
そ　　ん　　な　　男　　に　　巡　　り　　会　　つ　　た　　こ　　と　　は　　飲　　造　　に　　と　　つ　　て

不運としか言いはようのないことだった。取り調べにあたった係官のひとりには言葉には出さないものの内心では欽造に同情していた。裁判が行われ、弁護人は被害者も一定の落ち度があることを自ら認め和議が成立していること、欽造は病弱な妹のために身を粉にして働く勤勉な労働者で根っからの悪人ではないこと、欽造はこのような罪を犯したことを心から悔いていることなどを述べて情状酌量を求めた。欽造は再犯ということもあって比較的短い期間の実刑の判決を受けた。判決文を読み終えたあと裁判長は異例なことに欽造に直接自分の言葉で話しかけた。欽造が悪い人間ではないことは誰にでもわかる。しかし犯した罪は罪なのだからその償いをしなければならない。欽造はまだ若いしこれから将来があるのだから素直に刑に服して一刻も早く更生するようにと諭した。欽造は刑に服した。

服役中、もつとも近親である妹のみどりは遠出がかなわない事情があるという理由から二番目に近い叔父の面会が養父として許された。欽造にとつては叔父の口からみどりの様子を聞くのが数少ない励ましになった。妹が一刻も早く欽造が刑期を終えて帰ってくることを待ち望んでいること、そのためにも自分がより健康にならなければと療養に励んでいることを聞かされて、素直に刑期を務めた。

時折みどりからの手紙が届いた。きわめて質素な言葉で、欽造が一日も早く帰ってきてほしいという内容だった。みどりの手紙は欽造に力を与えた。服役者の誰もが、欽造がやむにやまれぬ事情があつて刑に服していることを理解して、欽造とあえても彼らだからこそ造の心の奥にある根っからのやさしさを讀みとつて、欽造にだけはちよつかいを出さなかつた。

服役者の中に六十をとうに過ぎた老人がいていつの間にか欽造はその老人と親しく話すようになった。ある時欽造はどうしても聞きたくなつて、「おじさんのようないい人がどうして懲役にならなければいけないのか」と尋ねたことがある。欽造は欽造なりに何か理不尽なものを感じていたのである。欽造は欽造なりに何か理「俺はなあ、なにをやつてもうまくいかなくて、盗み以外に能がなくなつちまつてな、この年になるまで塀の外と中とを行つたり来たも、うどうでもいいことなんだが、おまえみたいな若いやつがそうなつちやいけねぞ。おまえは悪党になれる人間じゃねえ。これから出ていくことだなあ。二度と帰つてくるようなまねだけはするんじやねえよ」

ない人間を犯罪者という方はわからないながらも、その方がおかしいのはいないかと感じていた。
欽造は刑務官が奇妙に感じるほどの模範囚だった。しかし誰が堀の中に入り誰が堀の外にとどまるのか決めるのは刑務官の仕事ではない。彼らの仕事は受刑者や管理することだ。誰が入るかは彼ら関心事ではない。早さで仮釈放された。欽造は、妹の元に早く戻ると期半ばで異例の早さで仮釈放された。欽造は、妹の思いだったのだ。にはそうするしかないのだとわかっていて、必死の思いだったのだ。

「お父の家に帰った欽造をみどりは静かに迎えた。」

「お父の家に帰った欽造をみどりは静かに迎えた。」
その言葉だけで欽造はみどりがどれだけ悲しんでいたのかをさとって、もう二度とみどりをひとりにすまいと心に決めた。みどりは心なしか少しやつれていたように思えた。
欽造は、二度までも罪を犯し妹を深く悲しませたこと、欽造にとつてはあまりにも長い間妹を置き去りにしたことの償いを、どうやっただけか、最初のかを必死にならなかつた日に、欽造はみどりにどこかい

でもあまり激しい運動はさせないようにとも言った。みどりは遊園地に行く前の晩からはしゃいでいた。叔母がみどりと欽造のため、に
棄当の支度をしてくれていた。欽造は一生懸命地図を見ながら、ど
うやってその郊外にある遊園地まで行くかを考えていた。

小学生の頃叔父につれていってもらって以来十数年ぶりに行く
た遊園地は何もか変わっていった。乗り物の料金はさらに幼頃
に父親が気まぐれで欽造を連れて一度いった。乗りの近所の小さな遊
園地よりもどれも一桁も二桁も違っていった。どの乗り物もあまりに
動きが過激に思えた。しかしそれでもみどりは次々と欽造ははじ
ねだり、うれしそうに声を上げながらしゃべり続けた。欽造ははじ
めみどりの体には激しすぎるのだからか心配したが、みどりの
喜ぶ姿を見て、みどりがうれしゅうい配したが、みどりの
みどりの中で限りある命の炎が激しく燃えかっただと考えた。
ことに気がつかない。欽造の鈍感さを責めることはできない。
それは欽造の妹への一途の惜しみない愛情と裏腹のものなのだ。欽
造とみどりの二人の兄妹は、日が暮れるまではしやぎ回ってからよ
うやく帰途についた。
「どこかであまいもの食ってから帰ろうな。にいちちゃんまだ金持っ
ているから」

欽造は借りた自動車を運転しながら、初めて自分がみどりに兄らしいことをしてやれたと思つて内心はしゃいでいた。

「うん」

助手席に座ったみどりの弱々しい返事に欽造は初めて異常に気がついた。

「みどり、おまえだいじょうぶか」

みどりは返事をしない。息づかいが激しくなり、全身が火照る様に熱くなつていた。欽造はあわてた。

「ちよつとがまんしろ。どつかで病院見つけてやる」

欽造はアクセルを強く踏んで車のスピードを上げた。その辺りの地理には詳しくなくどこに病院があるのかを知っているはずもないのに欽造は必死になつて車を走らせた。やがてパトカーがサイレンを鳴らして欽造とみどりの乗っている車を追跡し始めた。速度違反でも仮釈放は取り消されるのだという事を欽造は忘れていた。それどころではなかつたのだ。

「その足立ナンバーの白い車、スピードを落として路肩に止まりなさい」

パトカーから何度も警告があつた。しかし欽造の耳には入らなかつた。

「おにいちゃん、車、とめて。おまわりさんに、しかられるよ」

みどりの必死の嘆願に欽造はようやく車を止めた。パトカーが二台、路肩に止まった欽造とみどりの乗った車を前後に挟むようにして止まった。警官が降りてきて欽造の座っている運転席の窓のガラスをたたいた。

「君、窓を開けなさい。どうしてあんな無茶な運転をしたんだ」

欽造はドアのロックをはずすのがやっとだった。ドアをあけた警官は車内のただならぬ様子に驚いた。欽造はみどりの衰弱しつつある体を抱きしめていた。

「おまわりさん、医者、救急車呼んでください。みどりが、死んじまう」

警官は事態を飲み込んで救急車の手配をした。パトカーが救急車を先導した。救急車の中で欽造はみどりの細い手を握りしめながら自分をさいなみ続けた。自分の思慮のない愚かな行動のために妹の命が急速に燃え尽きようとしている。欽造はみどりの死期が近いのだという事を受け入れることができなかった。

叔父夫婦が呼ばれ、一夜があけた。医者がみどりの病室から出てきて深いため息をついた。

「どうしてあんな無茶なことをしたんだ。話をしてあげなさい。叔父さんも叔母さんもどうぞ」

欽造は叔父に背中を押されるようにして病室に入った。ベッドの

上にやせ細ったみどりの体が横たわっていた。欽造がおびえるようにみどりの体の上に手を伸ばすと、思いがけずみどりが目を開けてそのいかつい手を弱々しく両手で握り返した。

「おにいちやん、ありがとう。あたし、うれしかった」

みどりの命の最後のきらめきが、吹き消されるように消えた。欽造は膝から崩れ落ちて号泣した。

「おれは、みどりを殺しちまった。おれは。おれは」

叔父が自分もようやく涙をこらえながら欽造の肩に手をおいた。「そんなことを言うんじゃないやねえ。みどりは心底喜んでいたんだ。自分を責めるんじゃないやねえ」

冷たい霊安室の中に横たえられたみどりの体のそばに、欽造は黙ってじつと座り続けていた。心配した医者が声をかけた。

「まだいるのかね」

「おれがみどりにしてやれるのはこんなことしかないんです」

「自分が体をこわしたらみどりちゃんを見送ってやれなくなるだろ。よく考えろ」

医者にうながされてかろうじて立ち上がり部屋を出ていこうとして、欽造は一度だけ振り返った。横たわったみどりの体はあまりにも小さく細かった。

葬儀は町内会の集会所で行われた。悔やみの言葉を言う近所の人

々やみどりの友達は、命だつたのだ。幸せだつたのだと声をかけたが、誰も、みどりは、悲しんでいた。貧しい人々が互いに寄り添うよその実誰も心から住まうその町内で、みどりは誰からも愛されか
うに、ひっそりと、みどりの町内、みどりは誰からも愛されか
わいが、乏しい生活費を削ってまで、香典を出した。喪主である
の。皆が、乏しい生活費を削ってまで、香典を出した。喪主である
欽造に代わって、叔父が挨拶した。
こ、うして、とうとう、欽造はひとりぼっちになつてしまつた。
喪が明けてから、欽造は仕事にも行かず、食べるものもろくに食べ
ず、みどりの位牌がまつられて、いる仏壇の前で、毎日、泣き続け
た。見かねた叔父が、叱りつけるように言つた。
「男が、いつまでも、思つて、いるんじやねえ。そんなことで、みど
り、翌日から、欽造は、仕事に出た。もう、みどりのことは、口にせず、黙々
と働きた。誰かが、欽造の心は、やうつらで、空虚な魂を持つた機械
たが、実際には、欽造の心は、やうつらで、空虚な魂を持つた機械
が、半ば自動的に動き続けているだけだ、という、気がつくも
のは、ない。職場でも、いつも、笑みを絶やさない男になつたという。
し、欽造が、所帯を持ったのは、とうに、三十を過ぎて、からである。妻を愛

それから欽造のうわさはとんと聞かない。